

# 連載 第35回 福聚山史

池浦 泰憲 文  
及川 一晋 編

## 戦後復興から現代へ

### 5、立正幼稚園開園

昭和四十七年（一九七二）四月一日、埼玉県熊谷市に「熊谷立正学園 立正幼稚園」が開園した。当園は立正大学に併設された保育専門学校の付属幼稚園として開園し、初代理事長には、常円寺住職であった及川真学上人が就任したが、実はこの立正幼稚園は、住職であった真学上人の志と常円寺を支える総代各氏の力添えによって設立されたのであった。

昭和四十一年（一九六六）秋に本堂が落成し、一つの区切りを迎えた常円寺であったが、それから三年後の昭和四十四年（一九六九）六月より幼稚園設立に関する議事がみえる。

これによれば、「熊谷土地買収の経過報告」として「熊谷土地買収情況承認と今後の土地造成及幼稚園設置」と記録されている。「熊谷土地買収」とは、それより一ヶ月前の五月十一日の総代会の議事で、「常円寺名義熊谷土地買収について」とあり、同月十六日に、熊谷の現地に当時の総代渡辺喜之助、砂村英一、長谷川吉太郎各氏が赴き検討す



ることとされている。常円寺が埼玉県の熊谷に土地を求め、その地に幼稚園を設立するという計画である。

この事業は、日蓮聖人のご生誕（貞応元年（一二二二））から七五〇年の記念事業として進められたものであった。昭和四十六年（一九七二）がその年にあたり、熊谷の土地購入の完了報告がなされた昭和四十六年（一九七二）一月二十四日の役員会の議事録では、熊谷の土地購入と幼稚園設立が「主たる記念事業」とされている。

この時、常円寺の土地として購入された土地は五千坪であった。その内三百坪を新たに設立する「学校法人熊谷立正学

園」に寄付し、さらにそれは別の七百坪の土地を幼稚園建設敷地として学園に貸与するという手続きをとった。また、購入の資金については、これまで積み立てられた祠堂金などにより賄われた。そして、昭和四十七年二月八日、申請中であつた学校法人設立の申請が認可された。認可申請と並行して園舎の建設も着々と進められており、これをもって同年四月、「立正幼稚園」が開園するのである。ところで、この事業の意義について真学上人は、「当山の所在が新宿の過密都市



昭和47年 学校法人熊谷立正学園 立正幼稚園開園

及川真学上人(左)と岩田初代園長先生(左)『本妙院日修上人遺香』より転載)

に語っている。幼稚園の礼拝堂の額に「仏々現前」と書いた。「仏々現前」とは仏様というのは大体床の間のお仏壇の中にまつてあるのが仏様なんです。だが私が敢えて書いた「仏々現前」というのは、この幼稚園の子供が、百人二百人居る子供がみんな仏様だということ。小さい仏たちですよ。それが目の前だといふんです。現前というのは目の前だということです。その床の間や、もつたいぶつて高いところに飾つてある物が仏様でなくて、実は目の前にそういう仏さんがおいでになるといふことを、先生もまた、子供はもちろん父兄もみんなそれを知らなければいけない。知ってもらいたいということである。額を書いたんですよ。...

の中心にあつて、現在、将来を思料するとき田園にゆとりある土地を求めておくことが必要であること、又、幼児教育活動を行うことが宗教活動の一環として大切である」と説明している（昭和四十六年十月二十日責任役員会議事録）。昭和四十年代に入り、急速に都市化が進む西新宿地域の中で、常円寺が身近に自然と共生することのできる土地を確保しておくことは、宗教活動、いわば人々への「教化」という点において必要であると考えたのであろう。そして、そうした教化の原点ともいえる幼児教育活動の場として「ゆとりある」田園の土地を有効に活用していく、そのような真学上人の志が具体化されていったのである。

後年、法話の中で真学上人は次のよう

（昭和五十八年三月二十日、感話会法話より）また、真学上人はこの法話の中で、「麻の中のもぎ、つゝ（筒）の中の小ちなは（蛇）、よき人にむつぐもの、なにとなけれども心もふるまひ（振舞）も言もなを（直）しくなるなり。法華経もかくのごとし。なにとなければどもこの経を信ぬる人をば仏のよき物とをばすなり」つまり、「法華経の庭の中に育てば、自然に素直な心持ちに人々が変わっていく」という日蓮聖人の言葉（『随意御書』）に触れている。

真学上人が設立した立正幼稚園は、まさに園児だけでなく、そこに縁する人たちに自然に功德が「薫習」する「法華経の庭」をめざした場所であり、それが今も受け継がれているのである。（つづく）